

リンゴ褐斑病に対する各種殺菌剤の残効性

福島県果樹試験場病理昆虫部

平成16～17年度福島県果樹試験場試験研究成績書

1 部門名 果樹－リンゴ－病害虫防除

分類コード 04－01－23000000

2 担当者 菅野英二・尾形 正

3 要 旨

リンゴの殺菌剤散布回数削減を図るため、重要病害の一つであるリンゴ褐斑病について、各種殺菌剤の新梢葉における残効性を検討した。

(1) 試験には「ふじ」/M. 26、ポット植え2年生を用い、接種試験により行った。試験薬剤には、ベンゾイミダゾール系のトップジンM水和剤 1,500倍およびベンレート水和剤 3,000倍、メトキシアクリレート系のストロビードライフロアブル 2,000倍、ナリアWDG 2,000倍（未登録）およびフリントフロアブル25 2,000倍、有機硫黄剤のアントラコール顆粒水和剤 500倍およびジマンダイセン水和剤 600倍、アニリノピリミジン系のユニックス顆粒水和剤47 1,500倍を供試した。

(2) 接種は薬剤散布の8～10日後、14～15日後、21日後に、自然発病葉から採取したリンゴ褐斑病菌分生孢子により約 2×10^4 個/mlの濃度に調整した懸濁液を噴霧接種する方法で行った。調査は接種約1カ月後に発病の有無を程度別に行った。

(3) その結果、各殺菌剤の残効期間は、トップジンM水和剤が21日程度、ベンレート水和剤、フリントフロアブル25およびジマンダイセン水和剤が15日程度、ストロビードライフロアブル、ナリアWDG（未登録）およびアントラコール顆粒水和剤が8～15日、ユニックス顆粒水和剤47が8日程度と考えられた。

4 その他の資料など

なし